

令和2年度第1回御前崎市総合教育会議

日 時 令和2年9月28日（月）
午前9時00分～10時30分
会 場 御前崎市役所 303会議室

- 1 開 会
- 2 市長あいさつ
- 3 教育長あいさつ
- 4 協 議
・令和2年度 標準学力調査の結果等について
- 5 閉 会

出席者名簿（敬称略）

市 長	柳 澤 重 夫
教 育 長	河 原 崎 全
教 育 委 員	竹 田 和 世
〃	下 村 勝
〃	島 田 惠 美
〃	松 林 義 樹
御前崎市牧之原市 学校組合教育委員	増 田 克 之
〃	原 崎 志 保
総 務 部 長	増 田 正 行
健 康 福 祉 部 長	大 倉 勝 美
教 育 部 長	長 尾 詔 司
社 会 教 育 課 長	小 野 田 明 人
学 校 教 育 課 長	鈴 木 秀 和
教 育 総 務 課 長	高 田 和 幸
教 育 総 務 課 係 長	川 村 美 穂

欠席者名簿（敬称略）

なし

○司会

皆さん、おはようございます。定刻になりましたので始めさせていただきます。開会に先立ちまして、互礼を行いたいと思います。お互いに、礼。

それでは、ただいまから令和2年度第1回御前崎市総合教育会議を開会いたします。最初に市長あいさつ。柳澤市長、お願いします。

○御前崎市長（柳澤重夫）

皆さん、おはようございます。暑さ寒さも彼岸までと言いますが、彼岸も過ぎまして、朝夕はめっきりと凌ぎやすくなりました。山間からは紅葉の便りも聞かれるようになりまして、日毎に秋の気配と言いますか、深まりが感じられるようになりました。今日は令和2年度第1回の総合教育会議ということで、教育委員の皆さんには、大変お忙しい中お出かけをいただきまして、誠にありがとうございます。今年度に入りましてから、当初から新型コロナウイルスの感染が全国に拡大をしまして、本当に皆さんも御苦労されたと思います。特に学校関係では、4月11日、小中学校が休校に入りまして、この間は学校行事でありますとか、さまざまな行事が中止、または延期になったということで、特に教育に携わる皆さんは、御判断等が大変だったなと思います。そういった中で、今日に至っているわけではありますが、特に教育委員の皆さんには、今までの御努力に対しまして心から感謝を申し上げる次第であります。今日の総合教育会議には学組の教育委員も来てくださっておりますが、どうかよろしく願い申し上げまして、一言御あいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願いします。

○司会

続きまして、教育長あいさつ。河原崎教育長お願いします。

○教育長（河原崎 全）

改めまして、おはようございます。週初めの早朝よりお集まりいただきまして、ありがとうございます。今日は第1回の総合教育会議ということでございます。例年、第1回目が9月、第2回目が2月ということで開催をさせていただいています。今日は、今、市長からもお話がありましたように、学組の増田委員さん、原崎委員さんにもお声掛けをさせていただきまして、お出でいただきました。年に2回なんですけれども、市長の教育に対するお考えを伺うということ、また教育委員さんからも、それに対して御意見をちょうだいするという貴重な場だと思っておりますので、また遠慮なく、いろんなことをお話しいただければありがたいと思います。

例年ですと、この9月は全国学力学習状況調査の結果が出ているものですから、それについて話題にしていたけれども、今年度はコロナの関係で実施していません。ただ、本市においては、予算をつけていただきまして、昨年度から小2から小5、今年度はそれに中1、中2を加えまして、国の調査は小6と中3ですが、それ以外の学年も、学力の状況、生活の実態等がどんな状況であるかということについて、業者の調査ですが、その結果が出てきています。受けている生徒の数が6万人程度いるということで、十分信用に値する調査ということでございます。今日はその調査の結果について、学校教育課長から説明を受けて、それについてまた皆さんからこのことに関連してでも、それにプラスした形でも結構ですし、また、当市の子供たちの様子、これからどういうふうに育てていったらいいかというようなこ

とも御意見を賜ればありがたいと思います。

限られた時間ですけれども、よろしく申し上げます。

○司会

それでは、続いて協議に入らせていただきます。協議内の進行は、教育長にお願いいたします。

○教育長（河原崎 全）

本来ですと、この会議は、市長が主催している会議ということで、進行役を市長にお願いすることになるわけですが、本日は議題等が学力関係ということもありますので、私が進行役を務めさせていただきます。それでは、最初に令和2年度標準学力調査の結果等について、鈴木学校教育課長から説明します。

○学校教育課長（鈴木秀和）

おはようございます。学校教育課長の鈴木でございます。今、教育長からも説明がありましたが、例年ですと4月に小学校6年生と中学校3年生を対象とした全国学力学習状況調査を実施していましたが、新型コロナウイルス感染症の関係で今年度は中止になりましたので、市の予算で業者に依頼して、7月に学校の計画に無理のないところで実施をしていただいた標準学力調査と、i-checkという質問紙調査を元に、御前崎市の小学校2年生から小学校5年生、中学校1、2年生の学力の状況と学習状況について、私から説明申し上げます。

初めに、小学校の学力の状況について説明をします。調査した科目は、国語と算数です。同じ調査をした全国の小学生に比べ、平均正答率はどの学年も若干下回っています。この黄色いセルで表している「-3」というのは、全国の平均正答率に比べて本市の小学校2年生の国語の全国平均正答率との差となりますので、全国の平均正答率に比べると本市の小学生の正答率は、国語も算数も若干低かったという状況になりました。御覧いただいているのは、正答率を偏差値に変換して全国と比較したデータです。静岡大学教育学部の村山功教授に分析をしていただきましたが、平均正答率では全国よりやや低いものの、偏差値で比較するとどちらも中央の範囲で、極端に他市や他県に比べると低いとか高いという状況ではないので、特に問題があるという状況ではないと考察をいただいています。

同じく中学校1、2年生の平均正答率を全国と比較すると、中学校1年生については、国語は全国よりも3.1%正答率が高い。数学についても、1年生は平均正答率が0.4%高い。2年生は全国に比べると、国語は-3.9%。数学については-0.2%で、若干下回っているという結果になりました。先ほどの小学生と同じですが、中学2年生も全国よりも下回ってはいますけれども、平均正答率よりも偏差値に変換してみると、極端に学力が低くて問題があるという状況ではないということが結果としてわかりました。

次に、中学校の結果を、基礎力を問う問題と活用力を問う問題に分けて、正答率を分析した結果になります。平均正答率が全国よりも高かった1年生の表を御覧いただきたいと思えます。赤い数値は目標値に対して本市はどうだったのかというものです。目標値というのは、業者がこれぐらいの正答率が欲しいというものを併せて算出したものになります。下の青い数字は全国の正答率になりますが、御前崎市と書いてある上が目標値との差、下の青い数字のほうが全国の平均正答率との差ということになります。御前崎の中学生の基礎力と活用力を、業者が設定した目標値や全国値と比較すると、基礎力は全国値と比較して平均的か

やや高い状態で、活用力は平均的か低い状況であることがわかりました。この状況については、今、中学でお示ししましたが、実は小学校も同じで、どちらかという基礎力は平均的よりも高い状態で、活用力のほうがやや下回っている傾向であることがわかりました。

もうちょっと違う見方をしたのが、次のグラフになります。これは横軸が基礎、縦軸が活用問題の正答率ですが、右に行けば基礎が高い値だった子供たちの人数、上に行けば活用が高い値の子供たちの人数で、右下は基礎も活用もちょっとやや課題があるという子供たちの分布になりますが、どちらかという、この部分の層が大変厚いので、やはり基礎ができるが活用に課題があるということが今回の結果ではわかっています。

次に、人数分布図で分析をします。横軸は正答率、縦軸は人数になります。グラフの中央の縦のラインが、この学年の平均正答率を表しています。例えば小学校2年生で言うと、ここが平均正答率で、どちらかという平均正答率よりもできる子たちの層が厚いのが2年生ではよく表れていて、これはすごく理想的だなというグラフを表していますが、学年が上がるにつれて、だんだんこちらの上位層が中間層に移っていくというのがよくわかるグラフではないかなと思います。学年が上がるほど中間層の割合が多くなって、上位層の割合が低くなっているという傾向があります。これが、小学校の国語の分析になります。

続いて、小学校の算数の結果になりますが、これも国語と同様で、低学年では上位層が多くて理想的な分布になっていますが、学年が上がるほど、中間層の割合が多くなって、上位層の割合が低くなる傾向があります。

続いて、中学校国語の結果です。1、2年生ともに下位層が多いというよりも、中間層の割合が多くて、上位層の割合があまり多くないということが言えると思います。

続いて、中学校数学の結果です。人数分布は分散している傾向にあって、中間層が多くて上位層が少ないと言えると思います。

標準学力調査の結果をまとめます。御前崎の子供たちは、分布図から二極化や分散型の傾向があり、学力の上位層が少ないという結果になりました。また、基礎力は全国と比較しても平均よりも高い傾向にあります。活用力に課題があると言えます。基礎力が高いことから、支援員やしおかぜ先生を配置して、勉強につまずいている子供たちにも丁寧に支援ができる成果と言えます。また、授業において基礎基本を身につけさせたいと意識をしている教員の成果であると考えております。一方、先ほどの分析でも説明したように、活用力に課題があります。これは、事業が基礎に偏っている可能性があり、活用力を身につけさせる学習とのバランスに課題があると言えます。

この調査については、小学校3年生から5年生は昨年度も実施をしているため、経年で比較することができます。青いグラフは国語の正答率を表していて、赤いグラフは算数の結果を表しています。例えば、これは小学校3年生のグラフですが、小学校2年生のときの算数、国語の正答率に比べると、3年生のときの正答率はどちらも右肩上がりになっているので、学力が向上している傾向にあると言えるのではないかなと思います。小学校4年生は、昨年度より国語、算数ともに顕著に正答率が上がっています。小学校5年生は、国語は昨年度とほぼ同じ正答率でしたが、算数の学力は向上している傾向にあると言えます。中学校1年生は、一昨年、小学校5年生のときに、この標準学力調査を実施していますので、一昨年と比較すると国語数学ともに学力が向上していることがわかります。

これまで、しおかぜ先生の配置や支援員の配置、学力向上コンサルタント事業、授業改善アドバイザー事業、スクラム研究発表会の継続した取り組みにより、御前崎の子供たちの学力は向上傾向にあると言えます。しかし、授業改善アドバイザーの上智大学、奈須正裕教授

も仰っていますが、この先10年後の社会を生きる子供たちに必要な資質能力を身につけさせるために、多様な見方や考え方ができる授業作りを進めることが課題です。今後も基礎力と活用力のバランスのとれた授業改善について、引き続き各学校を指導、支援して参ります。ここまでが、標準学力調査の結果の分析になります。

続いて、標準学力調査とともに実施した、質問紙調査の結果について説明いたします。質問紙調査は、小学校4、5年生と中学1、2年生で実施をしました。別紙でお配りしていますが、質問の内容については、その別紙の質問を子供たちに回答してもらいました。どのような質問に子供たちが回答をしたか、御参照ください。

全体的な傾向からすると、例えば、あなたのクラスはいいところがあると思いますかとか、ボランティアや地域の行事に参加していますかなど、学級風土に関する質問や社会参画に関する質問には、肯定的な回答をする子供たちが多い傾向であることがわかりました。一方、仲間外れになるのが怖くて、本当は気が進まないのに友達の意見に合わせたり、一緒に行動したりすることがありますかなど、リスク管理に関する質問では、肯定的な回答が若干低い傾向にあります。グラフの中のリスク管理というところが、平均値よりもやや内側に寄っていて、社会参加だとか学級風土というところが、他の市町に比べると高くなっているという状況です。数値が高い項目については、今、説明申し上げたように、社会参画や学級風土に関する質問です。地域とのつながりや困っている人は助けるべきという考え方で行動している子供たちが、御前崎市は多いと言えます。また、学校での規範意識や学級の団結に対する意識が高い子供たちが多いのではないかと思います。これは、これまでの全国学力学習状況調査でも同じような結果が得られていたことです。一方、数値の低い質問項目は、リスク管理に関するものでした。今、スクラムスクール運営協議会で話題にしていますが、SNSとかでのつながりに不安を感じる子供たちは、学年が上がるごとに多い傾向であることがわかってきました。また、集団生活を楽しみながらも、他人との係わりに気を使って生活している子供の実態がわかります。

次に、スクラムスクール運営協議会で取り組んできている、基本的な生活習慣に関する調査結果です。青いグラフ、緑のグラフ、オレンジ色のグラフ、ピンク色のグラフと分かれています。これは、この青いグラフが学力で言うと高い層の子供たちを表していて、赤いグラフは低い層の子供たちです。例えば、朝ごはんを毎日食べていますかという質問に対して、やはり学力の高い子供たちほど、この質問に対して「はい」と答えている子供が多いということがわかります。また、毎日同じ時間に寝ている子供ほど学力が高いという結果になりました。

三つ目の質問ですが、昨年度から取り組んでいる、ゲーム障害やネット依存に関する質問です。テレビ、DVD、ゲームなど、遊ぶ時間を決めていると答えた子供ほど、学力が高い傾向にあることがわかりました。これは4年生のグラフですが、小学校はみんな同じ傾向にありました。中学1年生では、先ほど見ていただいたように、学力が全国よりも平均値が高かったわけですが、1年生で言うと、小学校とは違う傾向があるようなものがこのグラフからわかります。学力が高い層ほど、朝ごはんや寝る時間について肯定的な回答が多いのは小学校と同じです。しかし、中学生は学力の低位層でも、朝ごはんや寝る時間の質問に対して肯定的な回答をしていることが多いことから、全体的に基本的な生活習慣を意識した生活が身につけてきている生徒が多くなっていると言えると思います。また、ネットやゲームで遊ぶ時間が決まっていると回答した生徒については、学力の低位層ほど高いことがわかります。先ほど、小学生の上位層ではここが高かったと思うんですけど、実はここが1

年生の上位層については低く、逆に低位層の子供たちのほうが遊ぶ時間を決めていると回答している割合が高いということになっています。これは、学力が高い層の子供たちは自律した生活が身についてきているため、遊ぶ時間を決めなくても勉強に取り組むことができていると考えられます。一方、学力の低い子供も、ネットやゲームの時間には気をつけて生活しているということがわかるのではないかと思います。

質問紙調査のうち、早寝早起き朝ごはんなど、基本的な生活習慣に関する質問と学力調査の結果をまとめると、小学生では学力が高い層の子供ほど基本的な生活習慣が身についており、ネットやゲームなどの使用時間に対するルールを決めて遊んでいることがわかります。これは、全国学力学習状況調査と同様の結果と言えます。一方、中学生では学力の高い層の子供たちは、自律した生活習慣が身についていて、学力の低い層の子供たちも家庭でゲームやネットの使い方のルールづくりが進んでいるのではないかと考えます。これは、上が小学生、下が中学生のグラフになります。ネットやゲームを含む遊びの時間を決めていると回答する子供の割合は、全国と比較して御前崎の小中学生は高い割合になっています。したがって、昨年度からスクラムスクール運営協議会で話題にしたり、各学校でネットパトロールや情報モラル教育を進めたりしている成果が、子供たちの回答結果にも表れていると感じます。地域、家庭とスクラムを組み、基本的な生活習慣の向上を図り、御前崎の子供たちの課題である学力向上につなげる取り組みは、少しずつ成果が出てきていると言えます。また、ゲーム障害やネット依存の問題を保護者とともに考える機会を作り、インターネットと上手につき合う子供たちの育成につなげていきたいと思えます。

以上で、質問紙調査の結果について説明を終わります。御意見をよろしくお願ひいたします。

○教育長（河原崎 全）

標準学力調査の結果、及び質問紙調査の結果について、報告があったわけですが、質問等がありましたら、最初にお願ひをしたいと思います。いかがでしょうか。下村委員。

○教育委員（下村 勝）

純粋によくまだわかってないというところの質問をさせていただきたいと思うんですが、スライド番号12番のところ、分散型の傾向にあり、中間層が多く、上位層が少ないことを示すって書いてあるんですが、ここで言っている分散型の傾向というのはどういう意味で使っていますか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

どこかがすごく突出して多いというわけではなくて、上位層、中位層、低位層と、大体同じぐらいの割合になっているということです。小学生で言うと上位層が高いというのは先ほどちょっと説明しましたが、12ページのスライドで言うと、特に2年生の子がわかりやすいかなと思うんですが、上位層が多いわけでもなくて、中間層が大変多くて、下位層が上位層と同じぐらいかなというふうな感じで、それが分散型というように説明を申し上げました。

○教育委員（下村 勝）

一般的には分散が大きくなれば、上位層が増える、下位層も増える、中間が減るというこ

とになると思うんです。だから、これは分散型ではないのではないかなと思ったんですけど。それと関係するんですが、これは縦軸が制限されているので、分散しているように見えてい
るだけなのではないかなって気がするんですけどね。

○学校教育課長（鈴木秀和）

裏事情を申し上げますと、実は分散型というのも、業者の分析の言葉を少しそのまま使わせて
いただいたので、今の見方からすると確かにそうかなと、そういう言い方もできるかなと
いうふうに、私自身は感じました。

○教育委員（下村 勝）

もうひとつ、僕はすごく大事だなと思ったこととしては、小学校4年生と中学校1年生の
生活習慣の差ということの話がありましたけれども、小学校の間は時間をしっかり決めて
やっているほうが成績がいいほうで、中学生はちゃんと自分でコントロールしているほう
がいいということです。これ、とても大事なことですけど、何が大事かという、この切り
かえのタイミングがぴったり正しいところに来ているなど思ったことが、すごく僕は大事
なことだと思います。特に、中学生の段階で自律のほうに行けているということは、とても
大きな発見だと思います。あと、質問のところちょっと気になったこととしては、時間を
決めていきますかという質問なのでわからないんですけど、誰が決めていくかというところ
を問うて欲しかった気持ちがあります。自分で決めていくということは自律とイコールな
ので、それはそれでいいと思うんですけど、親が決めていくというのは、中学生の中にある
とそれは問題かなという気がします。以上です。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。御質問ございますか。松林委員、お願いします。

○教育委員（松林義樹）

聞き漏らしてしまったと思うんですけど、小学校2年生から5年生、中1、中2のテス
トというのは、全国でどれぐらいの割合が実施しているものですか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

約6万人です。

○教育委員（松林義樹）

6万というと、どれぐらいの学校数ですか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

県内でも、富士とか富士宮だとかでは実施をしている学校があると聞いていますけれど
も、具体的にどれぐらいの学校数なのかについては、すみません。ちょっと把握をしていま
せん。

○教育委員（松林義樹）

あと、小6と中3は、やっていないんですか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

はい。実は、全国学力調査を4月にやる裏番組で、小学校2年生から5年生でテストをやらないうちの子供たちについて、この調査を使って把握して、6年生、中3だけじゃなく、正確に分析して授業改善につなげていきたいとか、そういうことが狙いとしてあったものですから、中学3年と小学校6年生については予算をとっていなかったもので、実施していません。

○教育委員（松林義樹）

全国の問題は送られてきてはいないんですか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

全国学調は送られてきています。

○教育委員（松林義樹）

それは、実施はしましたか。

○学校教育課長（鈴木秀和）

各学校の実態に任せています。応じて無理のない範囲で実施分析をしてくれというふうには指導しています。

○教育長（河原崎 全）

御質問はよろしいでしょうか。そうしましたら、最初に学力の関係で御意見がございましたら、お願いしたいと思いますが、いかがでしょう。

○教育委員（増田克之）

いいですか。

○教育長（河原崎 全）

増田委員。

○教育委員（増田克之）

学力の基本的な部分、基礎部分がよくできているということで報告がありましたけど、これはやはり御前崎市で手厚くしてくださっている支援員やしおかぜ先生のおかげだと思っています。私も現役のころ、やはり支援員やしおかぜ先生が、ちょっと心配な子や遅れている子を細かく見てくださっていたので、その関係から大きくその基礎基本ができていていると思っています。

それから、応用力ですけども、やはりこれは、もう少し授業改善が必要かなと思っています。習熟度別に分けたりして、特に上位陣なんかはやっぱり子供たちの知的好奇心をくすぐるような授業を展開していくことによって、子供たちの生き方考え方というのは広がっていくのではないかなと考えています。今、それも取り組んでくださっていると思いますけれども、これからもそういう授業のより発展を願っております。

○教育長（河原崎 全）
竹田委員。

○教育委員（竹田和世）

しおかぜ先生の御活躍ということですが、下位層の生徒たちは本当にずいぶん救われていると思います。ただ、活用力の無さについてなんですけれども、今、増田先生からも習熟度別というお言葉がありました。私も本当にその活用力をつけるというところにフォーカスしていくとしたら、そういう取り組みって実際必要じゃないかなと思います。教科書のレベルというのが、年々、割合、基礎部分、基礎基本というところに重きを置いた教科書になっているように思います。ですから、それ以上の活用力と言ったら、やっぱり習熟度別、特に積み重ねが必要な算数、数学と英語に関しては、そういうことも必要というか、活用力だけを考えてときにはそういうこともひとつ必要なことなのではないかなと思います。ある文献で読んだんですが、4、50年前に新潟でそういう点数によるクラス別を作ったときに、差別選別教育というのはすごく批判された時期、日教組が強くて、そういう時期があったそうなんですけども、でも今、実際に現実として、私立の中学校は全て習熟度別クラスになっていますし、公立の中学でもそれを取り入れているところがたくさんあるというところで、本当にその活用力だけにフォーカスしたら、そういう手段もあるのではないかなということだと思います。

○教育長（河原崎 全）
島田委員。

○教育委員（島田恵美）

教育の意識の格差というのは、2000年以降すごく地域で言われていると聞いたことがあるんですけども、御前崎市では本当に先ほども言いましたが、先生方のおかげで教育を丁寧に行っているということが進んでいるのではないかなとすごく思います。今日も資料を見せていただいて、分析可能なデータの継続的な収集をすごく力を入れてやってくださっているというのは、すごく大事なことなのではないかなと思います。データを見える化して、みんな共通で話し合えるということが、私たちにとっても意識づけになっているのではないかなと思います。学習面だけで言うと、やっぱり一人一人が学識を高めてくれているのが本当に大事なことだだと思います。

資料のほうで、先ほどから基礎はできるが活用はできないというお話がありますけども、活用ができないというのは、家庭学習とか復習が足りないという人も入ってくるのか、どうでしょう。そればかりではないのでしょうか。

○教育長（河原崎 全）

先生方が、授業の中でどの層に焦点を当てているかということもあると思うんですが、やっぱり、ちょっと理解が不足している子供たちがみんな着いて来られるようにというほうに力を入れてくと、そこそこできる生徒のところまでなかなか手が届かないということもあるかと思えます。だから、わかる子に対してもジャンプアップするような課題を与えたりして、そういう子は比較的、教えなくても何か与えられれば自分でやっていけるようなところがあると思うものですから、そういう上位層の子が、もっとその子の可能性を伸ばせるよう

な、何かこう刺激を与えてあげるようなことをしていけば、自然に伸びてくるのかなというふうに私は思います。

あと、授業の中で、このごろグループ学習が主流になっていますけれども、そのひとつのグループの中で上位の子、下位の子がいて、お互い教え合ったりしているわけで、それは下位の子にとってもいいわけです。上位層の子にとっても自分がどれぐらい理解しているかということの確認になりますので、いいことだと思うんですが、そういう中でもうひとつ先生が、上位層の子に対して下の子に教えるだけじゃなくて、その子に対しての課題を出してあげていけばいいのかなということ、なんとなく私は感覚として思います。

○教育委員（下村 勝）

今の基礎と活用の問題なんですけれども、横軸と縦軸が基礎と活用のパーセンテージになっているので、基礎のほうができるのが当然のように思うんです。だから、必ずラインが下がるのは全国で全部同じ傾向にあるはずなので、それと比べて御前崎市がどうかというところを議論しないといけないのではないかなというのがまず1点。

それから活用のほうを上げたいのであれば、やっぱり今、教育長がおっしゃられたようなチャレンジングスピリッツみたいな、そこをいかに刺激して自分でやらせるか、授業の中でどうやるかということは、僕は基礎ができているということは、それはすごくいいことだと思うので、それから先はやっぱり子供の意識付けというのをいかにするかが重要なのではないかと思います。なので、その意識づけをどうするかということをいっぱいディスカッションすると、答えが何か見つかるような気がします。

○教育長（河原崎 全）

原崎委員。

○教育委員（原崎志保）

この問題なんですけれども、子供たち、親、両方の意識的な問題もありまして、基礎力はちゃんとしていることから、中間層の上位と上位層、上の子たちに関して、親と子のどこまでの教育を自分が学んでいきたいかという気持ち、ちょっと薄れているのではないかなと思います。例えば、このレベルに行って、将来高校はどこを選択する、大学をどこに選択するという問題を、中学のうちにもう少し意識づけをしてあげると、上の子たちは基礎がこれだけでできていけばどんどん伸びていくし、中間層の上の部分の子たちは、どんどん上層部に行くような気がします。ここ5、6年、その意識が子供たちも親も、このラインでいいかなという気持ちになっているのではないかなと思っています。なので、その部分をもう少し、勉強部分ではなくて何かの機会に話し合うとか、こういうことがあって、こんな感じ、こういう未来があるよとか、そういうことが、御前崎市にいとそこの部分が見えてこない子たちが多いんですよ。やっぱり、都会にいと、大学とか高校とかのことが自然に受け入れられてくるんだけど、この地域ではあまり実感性が無いので、そこにあたるころまで目標を立ててあげると、上の子たちもどんどん伸びていって、自分でやろうという気持ちになっていくのではないかなと思っています。

○教育長（河原崎 全）

現場の先生方は、1人も取り残さないようにということで、どうしても下位層の子供たち

に焦点を当てる。これはこれで非常に大事なことだと思うんですが、今原崎委員がおっしゃったように、やっぱり上位層の子供たちには家庭とか地域的なことがあって、あまり刺激がない。学校からもあまり、何て言うんですか、指導を与えられないとなると、何かそこで満足してしまうようなところがあるのかもしれませんが。具体的な手だてとしては、どういうことがあるんでしょうね。

○学校教育課長（鈴木秀和）

今、原崎委員さんから出たことについては、やっぱり近隣に高校がたくさんある地域ではないものですから、なかなか進学への目的を持たせにくいという地域性はあるのかなと感じます。ただ、その先のことを見据えたときに、社会性とかそういうところを見たときに、キャリア教育を御前崎中学校も浜岡中学校もすごく力を入れて取り組んできていて、地域の方に学校に入ってきていただいて、働くことのやりがいだとか、中学のときにこういう力を身につけておくといいよというような話を、職業講話や職場体験を通して学ぶ機会を多くしてくれているという点では、地域とか市外の人材を活用して、勉強に対する目的意識を持たせるという取り組みがひとつあるのかなと思っております。よろしいでしょうか。

○教育長（河原崎 全）

他に話題が、また別の話題でも結構ですが、いかがでしょうか。

○教育委員（竹田和世）

この間、「広報おまえぎき」を見たときに、行政が夢を育てるというフレーズがあって、すごくいいなと思ったんですけど、夢を育てる前に、今の子供たちがどれだけ夢を持っているんだろうかというところが、やっぱりすごく気にかかりました。全然具体的じゃないんですが、例えば、小学校の七夕の短冊にしても、具体的にああなりたい、こうなりたいって書ける子が昔よりも少なくなったような気もしていたりとか、何か今の子供たちが、日々の生活の中で夢を持てるような場面が少ないような。だから、それこそ小さいときからの読み聞かせだったり、何か演劇を見せたりとか、いろんな職業についている方に会って刺激を受けるとか、そういうことをいっぱいしてあげたらいいかなって、なんとなく思いました。

○教育委員（下村 勝）

すいません。もうひとつ質問を。教育の目標として、自律ってことを最終目標とするのであれば、他者の評価ではなくて、自分自身でいかに達成感を持つかということが、ネックになると思います。達成感を持つということは、やっぱりイコール、チャレンジする力ということにつながってくると思うので、何かこう、ある程度その子に合った課題を出した上で、自分自身が満足するか、他の人が褒めてくれたから嬉しいのではなくて、自分自身が満足するという繰り返しをいかに作っていくかというのが、基本になるのではないかなと私は考えています。大変だと思うんですけど、簡単なことではないんですけど、みんなそういう方向で先生たちの足並みがそろって行くと結構な力になるのではないかなというの思っているところです。

○教育委員（竹田和世）

集団学習の良さというのは、特にコロナで学校に行けなかった時期があったりしたもの

ですから、学校というところの良さとか、集団で学ぶことの良さというのは、本当にとってもよくわかるんですけども、やっぱり子供一人一人にとっては、丁度の学習というのがとても大事なのだと思います。だから、集団にいるから足踏みをしている時間が長くてはいけないしということ、すごく思っていて。今、自分の仕事のことを言う場ではないことはわかっているんですけども、中2の分数もできない生徒が来たので、大きく戻して学習スタートしたら、理解できることの喜びに気づいてきたようで、とても嬉しく感じますというコメントをお父さんからいただきました。もう手遅れということはないので、やっぱりその子にとっての丁度を見つけてあげて、手当てをしてあげると絶対に伸びていくということを強く思っています。だから、学校教育の中では、やっぱり足踏みをしている子はいらない。それを、活用力に結びつけてあげるような手だてというのは、考えてあげないといけないのではないかなと思います。

○教育長（河原崎 全）
島田委員。

○教育委員（島田恵美）
資料でも、自律した生活習慣が中学校で身についてきているということだったので、自分の考え、判断で行動するという事は、大人になってもずっと続くことなので、とても大事なことだと思いました。それで、先ほど下村さんが自分の達成感やチャレンジってことをおっしゃっていたんですけども、それは幼児教育のときから、できたという喜びとかをたくさん味わっていけば、それが小学校中学校に、学習のほうにつながっていくのではないかなと。チャレンジするという気持ちは、小さいうちから育てていくのではないかなとこの話を聞いて思ったんですけども、御前崎市はスクラムスクールという、とてもいい活動を市全体で行っているの、つながりというのを大事にして、幼児教育からこのチャレンジする心とか、行動力とかを育てていくのもいいのではないかなと思います。

○教育長（河原崎 全）
いかがでしょうか。松林委員。

○教育委員（松林義樹）
先ほど、しおかぜ先生や支援員さんのということで、本当に支援の予算をつけてやってくださっている何よりの成果が、基礎力になっているのかなと自分も思いました。それから、小6、中3以外の学年のテストも予算づけしてもらって継続してきているというのは、まだ3年目ですか。3年目ですけど、これから更に顕著な成果とか、課題とかが見えてきて、それに対しての手立てが明確になってくるのではないかなと思いますので、ぜひ継続してお願いしたいなと思っています。それから、先ほど出ました、習熟度別学習や教え合い学習とかが効果があるのではないかとありますが、現場でやっている、本当に何か、その学年任せとか教科限定の教員任せとか各学校任せとか、任せと言う言葉が悪いかもしれませんが、そうなっているのではないかなとこのことをちょっと感じています。御前崎市として、このような課題が見えて来ているから、それなら各学年何時間とか、ある程度を目安を設けて実施していく方向をね。そこまでは、まだ行ってないんですね。

○学校教育課長（鈴木秀和）

今ですか。今年度については、とても授業時間カットをしているので、なかなかそこは言いにくいのが現状です。

○教育委員（松林義樹）

本当にコロナでこのような状況なものですから、密を避けるというような中で授業を進めなくてはならないということもあるものですから、これがもう少し収まったところで、そのような学習形態がどれくらい効果を持っていくのか、市長さんと一緒に見ていけると本当に嬉しいなとか、良い結果になってほしいなということを感じました。以上です。

○教育長（河原崎 全）

今、現場というお話がありましたが、こういう調査も本当に生かすには、学校の先生方がこれをしっかり分析して、それを普段の授業にどのように活かしていくかというところが、一番子供と接するところであるものですから、大きいと思います。こういう機会に教育委員の皆様方から御意見をちょうだいするのも大事ですが、最後は学校の先生がたが、これを活用してどのように指導に活かしていくかというところが大事なのかなと思いますし、何年かやりながら経年でもっと見ていくということも大事だと思います。なかなか今、現場が多忙を極めているので、大変なところはあるんですけども、せっかくのこのようなものですから、各学校でも活用できていけば、更に効果が上がっていくのかなと思います。

市長さん、いかがでしょうか。

○市長（柳澤重夫）

今、教育委員さんからも、基礎学力であるとか、その活用力といったもの、これからの学力でありますとかさまざまな課題についてもお話を出していただきました。もともと私は、教育というのは教師と子供たち、また親たちと先生との信頼関係の上に成り立っていると思っています。先生だけでできるものではないと思っていますと同時に、教師の教育に対する情熱と言いますか、そういったもので教育が成り立っているとは私は思っています。

そういった中で、基礎力と応用力ですね、活用力イコール応用力と言ってもいいと思いますが、こういったものをどうして見つけるかということが大変重要なことだと思います。基礎力も活用力も、読解力と言いますか、読み解く力、こういったものが大変大事じゃないかなと思っています。そういった中で、これまでの教育のあり方でいいのか、これからのデジタル社会に向けて、社会に通用する人材育成をどうしていくのかということも、教育現場としては大変大きな課題であると私は思っております。ですので、これからの教育、私は先ほども申し上げましたように情熱を持ってする教育であるならば、先ほど竹田委員からもあったように、子供たちの夢と希望あふれる御前崎、これを目指しておりますので、その夢と希望はいかなるものか、子供たちにそれを持たせるためにどういった教育をすべきか、それも今までではなくて、これからの教育の課題であるかなと思っています。

その中で私は常々思っております。教育長にも、今までも先生と会いたいよということをお願いしてありまして、まだ実現しておりませんが。私は、教育現場で子供たちが学校へ来たならば、もう保護者に対しても先生が、学校に来た以上、私たちに任せてくださいということを保護者に言えるような教育をしてほしいと思っております。そのような中で、思い切りその先生が、教育の場で保護者に気兼ねするというものではありませんが、そういった意

味で、これからの御前崎市の目指す教育、しっかりと将来に向けての教育、御前崎の子供たちはこういった子供たちを育てていくんだ、社会へ貢献する人たちは、子供たちのためにはこんな子供たちを育てていくんだということはある程度目指さないと、ただ漠然として教育の学力向上だけでは、社会に送り出してもどうかと思います。御前崎の子供ってすごいなと社会から思われるような、そういった子供たちを輩出したいと思いますので、これからの教育現場の中で、そういった応用力を育てる必要があると思います。私は、応用力は机上だけでは育たないと思っています。いろんな体験とか友達との交流でありますとか、そういったいろんな体験の中で応用力といったものは育つと思いますので、さまざまなものを取り入れて一体的にやるのが、学力も、また応用力も上がるのではないかと考えています。

先ほど、教育長からもお話がありました、先生が教室ですべてを教えるのはなかなか大変なんですね。しおかぜ先生も支援員もおりますが。以前もちょっと言ったことがあります、例えば小学校の算数の授業がある、1時間かはわかりませんが、1時間あるなら40分でやる、あとは子供同士3人とか5人のグループになって、子供同士で最後まで分かり合えるような教育というようなことをやっていかないと。ただ先生が一方向的に教えるだけでなくですね。なかなかすべての生徒に対して、先生1人がわからない子供に教え込むのが大変だと思うんですね。ですので、例えば、今日の授業でこれだけは覚えてほしいというものがあつたら、40分で切り上げて、後20分は子供同士で分かり合えるまでやらせるというようなことも、これからもしできたらやってほしいなと思っています。そういったこともすでにやっていると思いますが、これからの社会を生き抜く子供たちには、学力のみならず、もちろん学力は基礎学力が大事だと思いますが、それだけでなく、その人間力、社会性といったものを併せ持った子供たちに育てて行きたいと私は考えています。

この間、新入職員が一同に集まって、いろんな話をしました。皆さんは何のために生まれてきたんですかということをお聞きしました。何のために生まれてきたのか。なかなか答えられませんよね。私は一言で言うと、働くために生まれてきたと思っています。その働くために、今、基礎学力を子供たちは養っていると思うんですね。社会に出て働く。これが私たち日本国民として課せられた使命と言いますか、働くことが私たちの生まれてきた根っこでありますので、社会で働くためにはどういったことをしたらいいのかということが、私は教育に課せられた大きな課題ではないかなというふうに思っております。そんなことを考えながら、常々教育とは、人間づくりとはどういうものかなと、私もいろいろ思いながらですが、とにかく人というのは、学校や社会といった集団生活以外に、社会性と言いますか、人間性と言いますか、そういったものを身につける場所はありませんので、とにかく教育の中で、豊かな社会性、人間性、そういった人間の魅力を作っていただければいいなと思っています。私は、浜岡町時代、議員だったときに、教育長に一般質問したことがあります。今、その教育長はおりませんが、学校教育の中で、どこかに職業教育のようなものも少し取り入れてはどうかという質問をしましたが、そのときには明確な回答はありませんでした。私は、いろいろな体験の中で、子供たちにも目指すべきもの、将来こういったものを身につけるためにも、いろいろな職業教育とか現場を見てもらうということが重要じゃないかなと思っています。その中で子供たちが今、どんな教育をしているのか、私は現場がわかりませんが、例えば二宮金次郎とか松下幸之助でありますとか、昔の偉人にはさまざまな成功事例がいっぱいあります。こういった人たちが、どんなことをして今があるのか。このような目指すべき人物像というようなものも、少し教育の場では必要じゃないかなというふうにも思っております。現場ではやられていると思いますが、そういったいろいろな子供たちの人間力

を養う肥やしになるようなものを作って欲しいなと私は常々思っています。決して学力を隅にやるものではありません。基礎学力が一番大事であります。昔から読み書きそろばんって言いましたよね。これだけは、どこへ行っても大事なことでありますので、これだけはしっかりしていただく中で、先生方には自信を持って、学校へ来たら私たちに任せてくださいと、保護者に対してそれぐらいの情熱を持って現場にあたる、そして、御前崎の子供たちを私たちはこうして育てたいんだ、だからお願いしますということを、保護者にも言うぐらいのものを私は欲しいなと思っていて、無理な話かもしれませんが、そういったことを私は先生方に会って話をしたいと思っています。すみません、ありがとうございました。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。次に、後半部分で子供たちの生活についての資料もありましたけれども、このあたりについて何か御意見がございましたら、ちょうだいしたいと思います。いかがでしょうか。下村委員。

○教育委員（下村 勝）

最初のリスク管理と社会参加、学級風土という特徴は、私はすごくいいのではないかなと思いました。リスク管理が低いと出ているんですけども、それだけ守られている環境にいるという証拠なんだと、人を信用している証拠なのかなと思います。なので、これが低いことは決して悪いことではない。ただ、1点、もし可能性があるとするれば、家庭とか学校で親や教師が手を出しすぎているときはよくないと思います。なので、そこだけ控えれば、基本的にはこれでいいのではないかなと私は感じました。すごく面白い結果だなと思って。街の子はこういうことは出てこないと思いますね。

○教育長（河原崎 全）

いかがでしょうか。増田委員。

○教育委員（増田克之）

生活習慣の関係ですけれども、スクラムスクール運営協議会の成果が出ているなどこのを感じています。私が携わったときは、早寝早起き朝ごはんということで取り組んできて、そのときも数値がうんと上がっていました。それが、その後もずっと続けられているというのは、各家庭の保護者の皆さんが取り組みを理解してくださって、今も続いているんだろうなと思っています。

それから、SNSの問題ですけれども、これもスクラムスクール運営協議会、また、学校教育課で考えているような方向に進んでいるのかなと思っています。香川県が県の条例で作りましたけれども、今訴訟にもなっていますよね。そういう条例で決められたことに対してのものがあるのではなくて、これを見るとやはり家庭でのルール作りが進んでいるということは、それだけ家庭でSNSについて話し合われている証ではないかなと思います。そういうふうに、上からの押しつけというルールではなくて、その家庭で親と子と話し合って納得できるルールを作っていくことが大切だし、その中でやはり家庭内のコミュニケーションも増えていく良い傾向にあるのではないかなと思って、これを見させていただきました。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。竹田委員。

○教育委員（竹田和世）

グラフの中で、生活習慣と学力の関係というのがとても顕著だと思いました。増田先生が言われたようにスクラムスクール運営委員会でのネット依存、ゲーム依存のそういう問題を、今、本当にタイムリーな取り組みだということで、これからも進めていかなくちゃいけないというふうに強く思いました。それから、リスク管理。私の中でグラフの中でのリスク管理という言葉と合ってくるかわからないんですけども、子供が仲間外れにされていくのが怖い。で、自分の気持ちを、だからそこで閉じ込めてしまう、断り切れないとかっていうのは、この地域性とか風土っていうのとすごく関係しているのではないかなと思います。それで、それこそ御前崎市の広報の中で自殺者のことを取り上げていましたが、御前崎市でも2か月に1人自殺者がいるというのがすごいショックでしたけども、将来そういう子を育てないためにも、こういうところに回答した子っていうのは、一人一人をそうしていくのは難しいですけども、でもやっぱり注意をしていかなくちゃいけないのではないかなということを思いました。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。島田委員。

○教育委員（島田恵美）

私も、これは本当にスクラムの成果だと思っています。浜中で今村先生の講演会をやったと聞いたんですけど、そのときに保護者の方が多数参加したっていうのを聞きました。

○教育長（河原崎 全）

ネット依存に対する対策の講演会ですよ。

○教育委員（島田恵美）

それもやっぱり表には出てないんですが、保護者も実はネットの子供の関係とかに悩んでいる方がすごく多かったんだなと思いましたし、これも意識を持って何かしたいっていう親の表れなのではないかなということを思いました。

生活習慣と学力の関係の中学1年生なんですけども、第一小の6年生のときに卒業式に参加させてもらったんですけども、そのときに、この子たちってちょっと違うな、できるなっていうのも、態度とか言葉とかで感じました。それが、中1になってのこのテストで学力につながっているということと、スクラムの成果の表れだっていうのはすごく感じました。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。いかがでしょう。原崎委員。

○教育委員（原崎志保）

この数値を見て、本当にスクラムは素晴らしいものだなと思っています。毎回行くことは

できなかったんですけど、皆さん真剣に話されていて、どうしたらいいか、どのようにしたらいいかっていうのを考えて、それを実行に移して、数値に表すということを去年1年やっていただいて、その結果がこの朝ごはんを毎日食べていますかという早寝早起き朝ごはんというところにつながっているんだと思います。今年のテーマは、ネット障害ということでやっているんですけども、なかなか話し合いとかもコロナの関係でできないと思うんですけども、この議題をちょっと突き進めていったら、もっと良くなるのではないかなと思っています。以上です。

○教育長（河原崎 全）

私から、ちょっとよろしいでしょうか。水を差すような話をしたいと思うんですけども、申し訳ありません。今日の資料ですと、ネット依存、ゲーム障害関係で家庭でのルールづくりが進んでいるということが出ていました。これは事実だと思いますし、保護者も意識がだんだん高くなってきて、そう進めていただいていると思います。先ほど島田委員からも話があったように、今年度、各学校でゲーム障害、ネット依存の防止に対する講演会を大学の先生にお出でいただいて、2学期になって始めました。先ほどの浜岡中学校も、2年生を対象に先日行われまして、それがその講演会だけのメニューだったんですが、ほとんどの親が来てくださったということですし、子供も一緒に聞きました。そういう点では、みんなに考えてもらうというような場を今作っているものですから、動きがあるのですが、ただ現実の数字を、今日ちょっと資料を皆さんに出していないんですが、口頭で申し上げます。ルールづくりでなく、実際に子供たちが、1日にどれくらいテレビとかDVDとかゲームなどのメディア関係に係わっているかということで、3時間以上係わっている割合なんですけれども、小学校5年生ですと、全国平均が30.4%に対して、御前崎市が36%。小6は、昨年、小学校5年生のときに全国体力調査の中で調査があったものですから、それで申し上げますと、全国が34%に対して、御前崎市は45%。中学校1年生ですが、全国が32.5%に対して、52.4%。中2ですが、全国が34.7%に対して、御前崎市が44.6%。最後、中3は、昨年度中2の段階で全国体力調査の数字が出ているものですから、これで申し上げますと、全国が36.6%に対して、御前崎市は53.7%。この子供たちが、1日3時間以上メディアに係わっているわけです。

ルールづくりは進んでいる。ところが、ルールは作っているんですが、なかなかそこまで行動が伴っていないという現実があります。ただ、なかなかシャットアウトということはできないもので、もう今は、どのようにうまくお付き合いしていくかということですから、やはり先ほどから出ているように、ルールを作って、自覚の中で動いていくしかないと思います。ただ現実としては、まだまだ全国平均よりも高いということがあります。

脳科学者の説とかによりますと、家庭学習を3時間やってネットを2時間やる子と、家庭学習0だけどネットは1時間の子では、やっぱり家庭学習0の子のほうが成績がいいという結果が出ているんですよ。ですので、やはりそこをいかに自分でコントロールできるようになっていくかということが非常に大事ななと思っています。家庭学習をやりながら、「ながら」でLINEとかもやっているということも聞くものですから、やはりそのあたり、自分を管理できる、コントロールできる力をつけていくということが非常に大事ななと思いますし、なかなかやり始めてすぐには変わっていかないものですから、これはまだ時間をかけて、自覚を持っていってもらわなければならないかなと思います。悪い方向には行っていないと思うんですが、なかなか現実としては厳しい実態があるというところは、ちょっと水を差すようで申し訳ないんですけども、御報告させていただきます。

○教育委員（下村 勝）

今のことに関して、これは僕の経験だけなんですけど、論拠があるわけではないんですが、子供とか、あるいは青年ぐらいまで含めて、結構成功する例としては、やっぱり時間を捨てているという意識を持たせることが、すごく効果があるように感じます。だから、そこに時間を費やして一生どのくらい捨てるつもりでいるのって、何歳分捨てるつもりでいるのって言ったら、結構響く人が多い。なので、そこに費やすことのデメリットっていうのを強く認識させるということは、子供には響くと僕は思います。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。

○教育委員（原崎志保）

このネットの問題なんですけども、うまく付き合っていく、うまくって言うか、上手に付き合っていくというのがこれからの課題だと思います。私自身もアナログなので、ほぼわからない状態になっているんですけど、当たり前のことしか、簡単なことしかできない状態になっています。でも、やはりこれから社会に出て行くにあたっては、必ず必要なことになっているんですけども、それをゲームで時間を費やして時間を過ごしてしまうのか、それともそれ以外のことで活用してくかという問題が出ていますけども、最近私自身の子供の様子を見てみると、何人かの子で時間を決めて、LINEをつなげて、同時に勉強をするようになっているんですよ。あ、そういうやり方もあるんだなって。わからないところは、もちろんわかる子が説明をしている言葉が聞こえるんですよ。特に数学なんかは、ここにこうやって、こうやってとかっていう。それで、ああそうかっていうのも聞こえてくるんですよ。そういうやり方も子供たちの中で、支度して、夜の8時半ごろかな、お風呂に入って全員集合みたいな感じでやっているっていう場面もありました。そこに関しては、すごく遅くまでやってない限りは見守っています。で、その間に勉強のこともありながら、学校であったことも話していると思うんですけども、そういうやり方もあるのかなと、新しいやり方かなと完全に見守っています。今の子供たちに、このネットの関係は本当に欠かせないものになってくる社会だと思っているんですよ。なので、本当に上手なやり方、上手な時間の使い方っていうのを覚えていっていただけたらなと、子供にはそう思っています。以上です。

○教育長（河原崎 全）

先ほどの下村委員さんと同じだと思うんですよ。そのように有効に使っていればいいと思うんですけどね。無駄に時間を使う、そのもったいなさと、あとスクラムの中でもよく出ましたけど、LINEをやったり、ネットをやったりするよりも、もっと楽しいものを発見していけば、そちらに時間を使うようになるのではないかという意見もあり、昨年度あたりによく出た意見だと思いました。

○教育委員（下村 勝）

自分自身の経験ですけど、僕は自分が子供のころには、毎日のように釣りに出かけていたんですよ。これだけ自然がある環境の中で、そっちに行かないっていうのはたぶんその楽しさを知らないってことなのかなという気がします。小学生のときとかに、やっぱりリスクを

守りたいがために、本当にこう、ガードしすぎている可能性がちょっとあるという懸念はずっと感じていることではありますね。教育長がおっしゃられた楽しさ、その他の楽しさってというのは、ここほど楽しい空間はあまりないのではないかなというくらい。楽しさを求めて都会から人が来るぐらいの環境にあるので、それはもっと活用するべきなのではないかなと思います。

○教育長（河原崎 全）

昨日、たまたま図書館の文学講座で、宮西達也さんという日本で有名な絵本作家が来て講演会をやったんですが、やっぱり感動を大事にしなきゃいけないということをおっしゃっていました。下村委員さんからもありましたが、ちょっと例が違うかもしれませんが、例えば、釣りをやって魚がかかったとき、釣り竿に感覚が来ますよね、魚が動いている。あの感覚とか、例えばソフトでも野球でもいいですが、打ったときにバットでボールを捉えたときのあのちょっとした感覚とか、なんか自分の五感の中でこう感じるもの。そういうものが大事なのかなと思うんですが、今の子供たちに言わせればゲームの楽しさはたまらないものがあるって言われてしまうのかもしれないんですけどね。何かやっぱり昔ながらの感覚ってというのは大事なのかなというふうに思います。

○市長（柳澤重夫）

よくテレビに出ている齋藤孝っていう教授がいますよね。その齋藤孝先生が以前、下村先生が今言ったような遊びというか、そういった釣りであるとか、別に釣りじゃなくてもいいんですが、そういう遊びをする子供ほど学力が高いというようなことを言っていました。そういった意味では、どんな遊びかは別にしまして、学校からちょっと離れて、自分の楽しみというか、釣りであるとか、さまざまな体験をすることが、かえって学力が高いということも、齋藤孝先生が以前言ったことがありますので、そのようなことも今、大事かなと思いました。

教育長が言ったように、感動をとということですが、人間というのは感動の数が多いほど心が豊かになって、泣いたり、本当に感激したり、耐えがたい悲しみであるとか、そういった感動。感動とは言わないかもしれませんが、人との涙を流すような感動であるとか、そのような数が多いほど、人の心は豊かになると思いますので、そういったこともぜひ教育現場の中でですね。今の子供って感動しないですよ。無感動、無関心、無頓着というか、みんな無が付いちゃうんですね。ワーッと涙を流すような感動って無いと思うんですよ。みんなでこう抱き合って喜ぶような感動は。そういった感動は、私はすごく大事だと思うんですね。子供たちができないものは、こちらから仕掛けるしかないと思います。

○教育委員（下村 勝）

今、感動の話が出たので、これもずっと思っていることなので、コメントしたいと思うんですけども、ゲームの一番の問題は、安い感動があることです。安い。もう、本当にチープな感動と刺激があるんですよ。それに慣れていることに、1番の問題がある。だから、達成感が増えるためには、ちゃんと苦労して、それぞれの。魚もそうですけど釣れるかどうか分からないわけです。そこに何日も行って、やっと釣れた、大きいのが釣れたとか、そういうときに初めて感動があるんだけど、ゲームとかだともうプッとスイッチ入れて2、3分で何かものが釣れるような、そんな感動になっちゃうんですよ。そういうことがずっと積み重な

ることの怖さっていうのはすごくあって、だから今、市長さんがおっしゃったような無関心、無感動っていうのは、元はたぶん安い感動がたくさんあるからで、それを本当の感動だと勘違いしている子供がいっぱいいる。そこを何とかクリアしていくと、本当の感動って何だというのがわかるのかなという気がします。

○教育長（河原崎 全）

簡単にいくと、逆に言えば、思い通りにならないと腹が立ってきたりするかもしれないですしね。

○教育委員（下村 勝）

ああ、いるでしょうね。

○市長（柳澤重夫）

最近の子供たちから、わあ、すごいなあとか、そういう声を聞かない。私たちは、いいもの、すごいものを見れば、わあ、すごいなあと思うんだけど、子供たちは何にも言わないですね。だから、私たちの感覚では感動しているけど、日ごろからそういった感動に慣れてしまっているというか、そういうことになっているんですね。

○教育委員（松林義樹）

先日、御前崎と白羽の園に行かせてもらって、0歳児から年長さんまでの教育というか、保育を見させてもらいました。このデータでは、小学生の生活習慣が学習に効果を表しているということで出ているんですが、それを育てているのが園からのいろいろな体験じゃないかなと思うんです。いま言った釣りだとか、ザリガニ捕まえたりとか、タコとかホタルとか捕まえたりとか、そればかりじゃなくて、絵を描いたり、それから本、読書、読み聞かせをしてもらったりとか、音楽をやっていたとかっていうものを家庭が、今、コロナ禍で親がそれどころじゃない、もう倒産するかっていうような状態のところもあって難しいかもしれないんですが、そういったものを本当に小さいころから子供たちに与えていく、またはどれくらいやっているのか調査していく。それがどういう小学生や中学生につながっているのかという長い目で見て、そこからちょっと調査をして、力を入れていってもいいのかなと思います。それがゲーム以外の楽しみだとか感動だとか、そっちに伸びていく。そういうものを覚えていく。そういうふうになっていくのではないかなと言うか。

読み聞かせがいいというふうに言われるんですけど、それがどれくらい学力に結びついているのかというデータは、例えば、保育園、幼稚園でやっていた子が小学校でこんな成果ですよというものが、なかなか客観的なものはまだあまりないものですから、そのあたりのことが出てくれば、また御前崎市で出せるようになれば、更に保育園、幼稚園の教育または保護者の家庭力が変わってくるのではないかと感じました。

○市長（柳澤重夫）

これについては、松林先生が教育委員になられる前に、この総合教育会議の中でジェームズ・ヘックマンの話をしました。今、松林先生がおっしゃられているとおりでんすよ。幼児教育の中で子供たちに、やり切る力、成し遂げる力、それを幼児教育のところでやらせるべきだということで、ジェームズ・ヘックマンが、40年間、子供たちをずっと追跡したんで

すね。今の子供たちがやっていることを40年間追跡して、それをやった子供とやらせない子供を比較した結果も40年間にわたって出ているんですね。どのぐらいの効果が出るのか、将来的な所得を言っては悪いですが、その子供たちが将来的に得た所得、そうでない子供たちが得た所得、こういったものが分析して出されています。先生が言った、非認知能力をどのぐらい高めるかということが幼児教育では大変重要だということ、ジェームズ・ヘックマンがすでに著書でも出していますので、そういったことも、ぜひ、少しでも先生方に見ていただければと思います。

○教育長（河原崎 全）

乳幼児教育の重要性のお話がありましたが、親御さんも今、スマホ育児とか、スマホ保育という言葉があるように、先ほどのスマホに関連づけて言うと、もうお母さんたち自体がスマホで育てようというのものもあるものですから、そのあたりも園を通じて警鐘を鳴らすような手立てをとっているところですよ。子供たちにはなるべく読み聞かせを、ボランティアの方もそうですが、何より親御さんが御家庭でやっていただけるのが一番いいのかなということと呼びかけをしています。

そろそろ時間も少なくなりましたが、何かありましたら、お願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

○市長（柳澤重夫）

本当に今、学力であるとか、さまざまな問題について、教育委員の皆さんから課題と有意義な話をいただきました。御前崎市の人材育成といったものも、みんなで考えてやるべきだと思うんですね。あるいは教育現場の中で、先ほど奈須先生のプランの話がありましたが、奈須先生が仰っているような、10年後の人材育成ということも含めて、10年後に通用する人たち、どんな人たちが必要になるかということも含めて、それに沿うような人材育成、教育もしていかななくてはならないと、私は今、話を聞いていて思いました。同時に、5年後、10年後に社会が求める人材は、今の人材育成、求める人材とは変わってくると思います。デジタル社会になってということや、これからのデジタル社会に通用するような人材育成はどうあるべきかということも含めて、みんなで考えたほうが良いと私は思いましたので、よろしくお願いします。社会が求める人材と、今、教育でやっているギャップですね。社会と社会が求める人材と教育、教育でどんな人材を育成するのか、このギャップが少なくなるような教育をしていく必要があるかなと私は思っています。よろしくお願いしたいと思います。

○教育長（河原崎 全）

ありがとうございます。今日、この場で出た御意見等を施策に活かさせていただきたいと思っております。中途半端なところもあり申し訳なかったですが、さまざまな御意見をちょうだいしました。ありがとうございました。

○司会

協議をありがとうございました。今、ありましたように、さまざまな御意見をいただきまして、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、令和2年度第1回御前崎市総合教育会議を閉会とさせていただきます。